

## 東京・多摩地区の薬-薬連携協議会の活動紹介

日本薬剤師会雑誌第 55 巻 第 6 号 2003.6 掲載

下平秀夫、茂木徹、谷口廣光、戸塚淳逸、阿部宏子、明石貴雄

### 「Keyword」

薬薬連携 / 医薬分業 / 薬剤師会 / 病院薬剤師会

alignment of the pharmacists / separation of dispensing and prescribing functions  
〔SDP〕 / pharmaceutical association / society of hospital pharmacists

### 〔はじめに〕

平成 14 年 4 月、東京・多摩地区の薬-薬連携協議会が発足した。参加しているのは、多摩地区の基幹病院 6 施設の病院薬剤師と、南多摩地区の保険薬局より選出された薬剤師で構成され、南多摩地区運営協議会と呼んでいる組織である<sup>1)</sup>。現在さらに発展し、連携のための組織を作りながら課題を整理、企画を立案している段階である。薬-薬連携としては、まだまだよちよち歩きの段階ではあるが、当地区の薬-薬連携の現況と展望について若干紹介させていただきたい。

### 〔多摩地区医療圏の現況〕

処方せん受取率は、全国平均が 48.8%であるのに対し、東京都は 61.2%である。(平成 14 年 10 月)<sup>2)</sup>。一方、多摩地区の分業率は東京都平均よりも高く、現在約 70%近くとなっており、分業の歴史も比較的早期であった。多摩地区の特徴は面積が広いこと、その中に医療機関が点在するため、マンツーマンの分業に依存せざるを得なかったという地域的背景があった。しかし、分業率が上昇していくなかで、処方せんの拡散が徐々にではあるが確実に起こっており、駅周辺の薬局では応需医療機関数も月に 50～150 機関となってきた。

八王子を例にとれば、東西 24km、南北約 13.5km という広さである。その八王子の中核病院は現在 2 ヶ所、西の東京医科大学八王子医療センターと、東の東海大学八王子病院である。この 2 病院が八王子市民のための第二次、三次の救急を担い、小児の NICU は都立八王子小児病院が行っている。この三病院が核となり、行政が中心となって八王子医療圏の中で病診連携を進めようと動いている。

### 〔薬-薬連携協議会設立の経緯〕

#### i 保険薬局の立場から

南多摩地区では、平成 4 年に 3 つの薬剤師会(八王子・日野・町田)の保険薬局と地域の中核病院である多摩南部地域病院薬剤部および、日本医科大学多摩永山病院薬剤部とで「南

多摩地区運営協議会」を発足した。なお、平成 15 年 4 月より、日野・多摩・稲城の 3 支部が統合して南多摩支部となった。保険薬局側の代表は薬業連携提唱の元日野市支部長の戸塚淳逸と八王子支部長の谷口廣光、病院薬局側の代表は、基幹病院薬剤科長の村田正弘氏と(当時日本医科大学附属多摩永山病院)、高取和郎氏(当時多摩南部地域病院)であった。この 4 名が中心となり症例検討会、医薬品勉強会などを開催した。

今回、この南多摩地区運営協議会が発展し、薬剤師が多摩地区の地域医療の向上に寄与することを目的として、より広く地区薬剤師会、病院薬剤師会に呼びかけることとなった。

#### ii 病院薬剤師会の立場から

平成 12 年、東京都病院薬剤師会に多摩西南支部と多摩東支部が設立された。その理由として、薬剤師研修会などは都心で開催されることが多いため、同じ東京都とはいえ、都心に出るのに 1 時間以上かかる多摩地区の病院薬剤師はなかなか出席することができない。そこで多摩地区でも独自の勉強会を開催できるようにと 2 支部が設立されたのである。その後、地域での勉強会を開くならば同じ地区内の保険薬局にも呼びかけて連携して勉強会を開催したらどうかということになった。

このような、両者の思惑が一致し、お互いに連携協議会をとろうということになった。

#### [連携協議会の委員構成]

本協議会の委員構成は表 1 の通りである。地区連絡(協)他のメンバーにはアドバイザーとしてご指導頂いており、今まで 2 回の出席を賜っている。

\*\*\*\*\*

表 1 東京・多摩地区の薬-薬連携協議会委員

\*\*\*\*\*

#### 都薬支部委員

(委員長) 戸塚 淳逸 (南多摩支部)

上村 直樹 (北多摩支部)

下平 秀夫 (八王子支部)

斉藤伸介 (南多摩支部)

根岸 務 (八王子支部)

等 淳一郎 (委員会本部)

堀 博昭 (八王子支部)

茂木 徹 (八王子支部)

山田 哲道 (南多摩支部)

山田 政人 (南多摩支部)

#### 病薬支部委員

(副委員長) 明石 貴雄 (東京医科大学八王子医療センター)  
阿部 宏子 (永寿会恩方病院)  
阪本 康典 (国家公務員共済組合連合会立川病院)  
前田 良廣 (青梅市立総合病院)  
村田 和也 (日本医科大学多摩永山病院)  
吉尾 隆 (桜ヶ丘記念病院)

地区連絡(協)他

新井 裕美 (町田支部長)、小坂 一郎 (日野支部長)、谷口 廣光 (八王子支部長)、  
村田 正弘 (現明治薬科大学) 等 (敬称略)

\*\*\*\*\*

[定例会]

平成 14 年 4 月に第一回協議会を開催。隔月に行い、4 月には第 7 回協議会が開催される  
予定である。(表 2)

\*\*\*\*\*

表 2 東京・多摩地区の薬-薬連携協議会開催状況

\*\*\*\*\*

場所 八王子薬剤センター駅前薬局 2F 会議室 (東京都八王子市旭町)

第 1 回 平成 14 年 4 月 27 日 出席者 23 名  
第 2 回 平成 14 年 5 月 29 日 出席者 12 名  
第 3 回 平成 14 年 7 月 12 日 出席者 11 名  
第 4 回 平成 14 年 9 月 20 日 出席者 15 名  
第 5 回 平成 14 年 11 月 15 日 出席者 11 名  
第 6 回 平成 15 年 2 月 21 日 出席者 11 名  
第 7 回 平成 15 年 4 月 18 日 出席者 11 名

\*\*\*\*\*

[相互理解に向けて]

第 1 回、第 2 回の協議会を経てまず相互理解が必要であることを再認識した。お互いの  
立場、考え方の違いを知ることが連携の第一歩であり、大変重要なことであると考えられ  
た。以下は各委員からの発言である。

「病院薬剤師と薬局薬剤師、お互いがこんなにもお互いのことを知らなかったのかと実  
感した。」(病薬支部委員)

「まずお互いの立場が違う。薬局薬剤師は経営者、店主の立場の者が多いのに対して、病院薬剤師は勤務者、組織の一員という立場。処方せんを出す側、受ける側という立場の違いもある。年齢も違う。これだけ違うと、考え方やものの見方がまるで違うことに気がついた。」(都薬支部委員)

#### [問題点の掘り出し]

第3回協議会までに問題点の整理を行った。第4回協議会ではチーム編成を行った。両者共通の最大の問題点として、「処方せんが適正に書かれていない」「疑義照会について連携をとっていく必要がある」が双方に上げられた。

以下は各委員からの発言である。

#### 連携の意義

慢性疾患が増えているなかで外来、入院を繰り返す患者さんがそのどちらでもきちんとしたサービスが受けられなければ、薬剤師に不信感を抱く。連携が取れていればきちんとしたサービスが提供でき患者さんが喜ぶ。患者さんが喜ぶことが連携の第一義のはずである。その結果、薬剤師の職能もアピールできる。(病薬支部委員)

「いま問題点を整理しておけば、今後どこか別の地区で医薬分業を行う場合、どんな注意が必要なのかがわかる。これからさらに医薬分業を発展し定着させていくためにも、いまやる必要がある。」(都薬・病薬支部委員)

「薬薬連携を推し進める意義について、医療機関のなかで行なわれている薬に関する患者サービスが、分業によって地域に広がった場合でも同じサービスを受けられるようにしなくてはならない。そのためには、病院薬剤師、保険薬局薬剤師が共通の知識を持ち、処方せんがスムーズに流れ、きちんとした調剤と情報提供が行なわれる必要がある。それらを実現するには薬薬連携で薬剤師が職能を果たすことできる環境を作る必要がある。」(病薬支部委員)

#### 不備処方せん・疑義照会について

「不備のある処方せん、約束処方が記号で書かれた処方せん、読めない字の処方せんがまだまだ少なくないのが現状。疑義照会が薬剤師の義務であることを知らない医師も多い。」(都薬支部委員)

「処方せんを院外に出す以上、きちんとしたルール作りをすることは病院薬剤師の務めだと思う。また、病院薬剤師は医師にそれだけのことをいうための力を持たないといけない。」(病薬支部委員)

「病院薬剤師は院内の医師に正しい処方せんの書き方をレクチャーすること。またなぜ疑義照会がくるのかを理解してもらうことが必要。」(都薬支部委員)

「後発品使用の意図や一包化に対する医療機関の方針を聞いておけば、必要のない疑義照会も減るしトラブルも減る。医療機関の方針を聞くなかで薬局の現状も話せば薬局薬剤

師の立場もわかってもらいやすい。」(都薬支部委員)

#### 服薬指導について

「保険薬剤師の説明で患者さんの不安を増長させることのないように情報交換や合同研修会が必要」(病薬支部委員)

「入院時や退院時にどのような服薬指導が行われているのか知りたい」(都薬支部委員)

#### 情報の共有化・お薬手帳

「病院からは患者さんがどこの薬局に行っているのか跡を追えない。処方せんを渡してしまったら患者は医療機関の手を離れ、自宅でどのように薬を飲んでいるのか、健康管理をしているのか、病院薬剤師はまったくわからない。これでは何かあったときに、問い合わせることもできない」(病薬支部委員)

「各薬局にどの患者さんが行っているのかのデータベースが欲しい。疾患名や薬の情報は入れなくてもいいから、誰がどこにいつているかが判れば連携をとるのに非常に役立つ。」(病薬支部委員)

「患者がどのような疾患にかかっているのか、医療機関でどのような治療や説明を受けているのか保険薬局ではわからないため、患者さんに服薬指導を行ったり健康管理をする上でこれが大きなネックとなっている。」(都薬・病薬支部委員)

「医療機関によっては退院時情報提供書を出しているところもあるが、それが誰の手に渡り、どこまで活用されているかはほとんどわかっていない。」(病薬支部委員)

「医療機関から患者情報を電子化して保険薬局に流すにはプライバシーや情報セキュリティの問題がある。その点、お薬手帳なら情報を管理するのは患者自身で問題がない。」(都薬支部委員)

「せっかくのお薬手帳がまだ充分活用されていない。ただし、普及していくためにはフォーマットの統一が必要。」(都薬支部委員)

「お薬手帳を何冊も持っている。do 処方なのに漫然と記載されている。」(病薬支部委員)

「お薬手帳は1冊にまとめるべきで、病院でも薬局でも提出し、記入してもらえることをもっと知ってもらうキャンペーンを行うべきだ。」(都薬支部委員)

#### 備蓄について

「後発品の処方について地域である程度のルールを作っておかないととても対応できず、患者さんに迷惑がかかる」(都薬支部委員)

「近くの病院から刻み漢方を出したいといわれ困っている」(都薬支部委員)

#### 薬-薬連携以前の問題点

薬局はネットワーク化されており情報を流せばスムーズに回るが、病院の薬剤部間には

連絡網がなく情報が回らない。(都薬支部委員)

薬局はそれぞれが一国一城の主だけに、医療連携に関する意識が高いとはいえない。(都薬支部委員)

法律・医薬分業システム等に関する問題提起

「医師にも専門があるように、薬局にもジャンルがあっていい。ここは漢方が得意、麻薬を揃えている、小児科専門というような。そのうえで医療機関から紹介することがあってもいいのではないか。」(病薬支部委員)

「病診連携で病院から診療所は紹介してもいいのに、なぜ分業ではしてはいけないのか」(病薬支部委員)

「がん患者が麻薬を薬局で受け取ることも増えてきたが、麻薬には種類がたくさんあり、しかもそれぞれが高額である。頻繁に出るわけでもないのにすべての麻薬製剤を一薬局で取り揃えておくのは難しい。しかし、患者側からすればどこへいっても薬が受け取れることが分業の理念であるのに、うちでは取り扱っていません、といわれるのは理不尽と感じるだろう。」(都薬支部委員)

「せめて、薬局間で麻薬の貸し借りができればいいのが、法律でそれも禁じられている。管理センターでの小分け等の措置はとれないものか。」(病薬支部委員)

以上を踏まえ、課題を克服するための具体的な対策を検討するため、以下の 3 チームを編成することにした。

- 1 班 適正な処方せんと正確な調剤
- 2 班 患者情報の共有化「お薬手帳等の利用」
- 3 班 研修・教育

[問題解決のための方針]

第 5 回、6 回協議会では、チーム毎に分かれて、グループミーティングを行い、各リーダーより今後の方針について発表した。

1 班 適正な処方せんと正確な調剤

・発表(茂木) 開局側が中心となり不備処方せんを集める。病薬側でも不備処方せんを集めておく。解析方法は検討中である。

2 班 患者情報の共有化「お薬手帳等の利用」

・発表(堀) 現在のお薬手帳では do 処方でもベタベタ貼られているなど活用し難いところがある。最終的には病院でも薬局でも記載でき、医師も利用できる独自の形式を立ち上げるべきではないか。

### 3班 研修・教育

・発表(村田) 病薬では、多摩地区として臨床薬学研究会を年5回八王子東急スクエアの学園都市センターで行っている。これ以外の研修会を増やし、病薬・都薬の共同開催としたい。この会の成果を発表することも重要である。プレアボイドなどの症例解析も行いたい。

#### [今後の展望]

東京・多摩地区の薬-薬連携協議会はまだ連携としては初期の段階であり、課題も多い。しかし、まず同じテーブルについていたことの意義が大きいとの認識で一致している。じっくり、時間をかけてお互いを理解し、問題の発掘とその解決に向けての方針も決めていかなければならない。最近の連携活動として、研修会の共同年間予定が出来上がった段階である。こちらでも薬-薬連携の意義や活動を紹介しながら、会員各位の意識の向上を図って行きたいと考えている。

#### [文献]

- 1) 「東京・多摩地区の薬薬連携への取り組みでみえてきた薬剤師の課題」,  
Quality Pharmacy 2002年11月号 1-4
- 2) 日本薬剤師会ホームページ, 医薬分業進捗状況 処方せん受取状況の推計  
平成14年10月分 (<http://www.nichiyaku.or.jp/uketori/ukez1410.html>)より